フィールドで考える

聖典の朗誦を競う少女たち

小杉麻李亜
日本学術振興会特別研究員（PD）

イスラーム世界に広がる朗誦大会

二〇一〇年一〇月七日、筆者は関西空港発インドネシアの首都ジャカルタ行きの飛行機に飛び乗った。三日後に迫ったリアウ州の朗誦大会に駆けつけるためである。

「朗誦大会」というのは、全イスラーム世界が共通にいただく聖典クルアーン（コーラン）の暗誦の技を競うトーナメント式の大会のことである。朗誦の専門的な訓練を積んだ出場選手たちが、クルアーンを原文のアラビア語のまま、いかに美しく、いかに正確に暗誦できるかを観客と審査員の目と耳の前で披露する。

現在、イスラーム世界の各地で毎年のようにおこなわれている行事であり、そのなかでもインドネシアが特に盛んである。州ごとの予選から始まり、そこを勝ち抜くと全国大会が待っている。全国大会は二千数百人が一堂に会し、国内最高水準の学者一〇〇人の前で戦いを繰り広げ、トップの座を競う。

さらに、全国大会の優勝者らは国際大会への足がかりをつかむことができる。国際大会をリードしているのは、伝統的に朗誦の中心地のひとつであるエジプトや、メロディをつけずに誦む流派の発信地となっているサウジアラビア、二〇世紀後半以降東南アジアの諸国を中心とした国際大会を主催し続けるマレーシアなど十数カ国である。

このステージを含む中央会場は本大会のために新設された

従来は中東地域が朗誦の本拠地であった。そこでは朗誦家といえば、中年・老年の男性である。二〇世紀後半にラジオやレコードが普及し、それとともにフサリー師やイスマーイール師らエジプト出身の大朗誦家の朗誦が世界を席巻した。彼らの録音は現在でも愛され続け、彼らの後続も現在でもすべて年のいった男性たちである。

一方、東南アジアではプロの朗誦の世界は男だけの世界ではない。そこには年若い女性や少女たちが朗誦の重要な担い手としていきいきと活躍する東南アジア特有の世界が広がっている。インドネシアの少年少女にとって、朗誦大会は不可欠なキャリアパスである。大会に出場するような選手たちは、生まれた村で幼少時に特別な才能を見出されるか、親のどちらかからその職能を継ぐことが多い。周囲の支援を受けてひとつずつ頂上に向かって階段を上がって行き、その果てに全国大会での入賞を夢見る。さらに、その天井を突き破って世界の舞台へ立ったならば、そしてそこでアラブの人びとと互角に戦い、勝利することができたならば、国際的な朗誦家としての輝かしい未来や国内の宗教界での確固たる役目が待っている。女性朗誦家は、国際的な場では中東男性たちの戸惑いや憤慨に出会ったり、性別による観客の限定などの驚くべき文化の違いにも遭遇しながら、経験を重ねていく。

待ちに待った州大会

さて、いよいよリアウ州の州大会である。クライマックスは全国大会であるが、その前に最大の関門、道の途中の激戦区であるのが州大会である。今回調査をおこなったリアウ州の大会は全国三三州のなかでも最大のもののひとつとされる。

出番を待つ選手ら。県チームごとのそろいのユニフォーム

筆者はこの八年ほど、朗誦の訓練を専門的に積んでいる幼児から二〇代までの女性たちの調査をおこなっている。その過程で、初めて全国大会の内部に入ることができたのが二〇〇六年の夏のことで、そのときはスラウェシ島の地方都市クンダリまで、ジャカルタの選手団とともに駆けつけた。

今回は州大会であるので、航空券の確保はそれほど困難ではない。ジャワ島にあるジャカルタからスマトラ島のリアウ州の州都プカンバルへ飛び、そこから車をチャーターして開催地クアンタンシンギンギへ四時間かけて向かう。リアウ州には十数の県が存在し、各県三十数人の選手と、コーチ、会計、県の公務員、運転手らが現地入りしていた。選手の健康管理のために、医者と看護婦までもがつき添う。慣れない気候のせいで遠くからの参加者たちは体調を崩していたが、選手たちはみな年若く、試合時の緊張とは裏腹に同世代の仲間との共同生活を満喫していた。

少女が聖なることばの器となるとき

ある日の昼下がり、ドアの隙間から少女の奏でる甲高い朗誦の声が聞こえて来た。隣の部屋を覗くと、試合を間近に控えた選手がコーチの手本に続いて、懸命に真剣な面持ちで旋律の流れの最後の仕上げをしていた。その顔には普段のあどけない表情が消え失せ、荘厳な気魄が宿っていた。

筆者はいつもこの変貌の瞬間を目にすると、不思議な気持ちがする。普段はおしゃれが好きで、級友にからかわれたことを気に病んで、家族が大好きで、深夜の大食が楽しくて、筆者と笑い合っている。その子はもはやどこにもいない。極度に集中して、外界から遮断されて視線は焦点を失い、全身から聖なることばをほとばしるようにひねり出す。少女は忽然と姿を消し、ただ、聖なることばの器として立ちあらわれている。その瞬間を目の当たりにすることの驚きは、何度経験してもいまだに鮮烈である。州大会は年に一度、日本の季節でいえば秋か春にある。筆者は今、少女たちの変貌の瞬間の煌めきを解き明かすために、次の大会を待っている。

選手たちはのどによいとされる熱さましドリンクを常備している